❸ 学生の意思決定の実態

理想の自分と現実の自分を客観的に認識できるか？

就職活動における意思決定

ここでは、実際の就職活動の選択の実態を、若手社会人の経験から語ってもらったデプスインタビューの内容を紹介していく。インタビュー目的はどのような初職の進路選択が今のライフキャリアにどう関係しているのか（していないのか）について我々が仮説を持つためである。

いつから考え始め、行動し、どんな情報を得て、どんな体験をし、何を考え、誰と出会い、どう決めていったのか、人によって実に様々である。一方で彼らの話を聞くと、“何を人生の理想とし現実とどのように調整するのか”、において、大きく分岐されることが分かる。（P15図❹「職業選択・決定のプロセス」）

彼らの「理想」と「現実」は、活動当初、就職活動プロセスの情報獲得や対話や思考によって拡張される場合がある。下のAさんの事例は現実だと思い込んでいた「学歴の壁」がゼミの先生との対話によって取り払われ、現実に対する見方に変化があったことが、その後のライフキャリアの向き合い方にも影響しているという事例である。

【学生の意思決定実態の5つのあり方】

就職活動の意思決定における自己調整過程（P15図❹）を5つのタイプに整理したものがある。例えば、「理想志向型」はあくまで理想を追求し、現実の自分を高めるあり方である。「理想回避型」は理想の自己を持っているが、労働の本質を考えたとき、あえてそれを追求せず、代替する方向を模索するあり方である。

これらの過程のあり方について、自分が今どのような状況で、どれに当てはまる考え方をしているのかメタ認知※することが重要である。より積極的に自分の実現可能な選択肢を明確化でき、さらに自分自身で決定した後の満足度がどの程度か、評価できるからである。

※メタ認知とは自分が認知していることを客観的に把握することである

❶意思決定における自己調整過程の5つのタイプ

理想の自己	追求	回避
明確	理想志向型	理想回避型
	理想至上型	理想拒否型
不明確		現実探索型

横山明子「理工系学生のための進路決定支援ツールの開発」（2011）（帝京大学宇都宮キャンパス研究年報人文編　第17号, 82-132）

学歴を気にしすぎていた

● Aさん　女性　● 入社先：人材業界・営業職3年目／文学部

初めは同じ選考を受ける周囲の学生の学歴と自分を比較して萎縮していました。エントリーシートの通過率が悪く、グループディスカッションでは一歩引いてしまっている自分がいました。そんなとき、ゼミの先生との面談で就職活動状況を聞かれ、自信を喪失している、就職活動が嫌になっていると話をしたところ、「学歴は洋服みたいなもの。高学歴の学生はブランドを身に着けて安心しているかもしれないけれど、企業が知りたいのは何ができる人かということ」と言われ、目からうろこが落ちました。

また、普段は口数の少ない先生なのですが、「リーダーシップがあって、物怖じせずに話せることが、君のいいところ」と言われ、評価されていたことに驚き、自分を取り戻したような気がして、踏み出す勇気が出ました。

そこからは、人見知りをしない、物怖じしない、人の顔を覚えるのが得意という長所を生かせるのではないかと思い、人材業界の営業の仕事に視野を広げました。

多くの面接を経験する中で、採用してほしい一心で相手に合わせ過ぎ、求める回答をしようと必死になり過ぎると、いい結果につながりませんでした。「無理して入社しても長続きしない」と思い始め、等身大の自分を伝えながら、こちらからも「自分が合う会社」を選んでいこうと考えを改めました。

そこで、面接では社員の方と直接話す機会をつくってもらい、会社側がどう対応してくれるかで、社風を判断したり、あえて「就職して嫌だったこと」を聞いて、嫌なことに共感できるか（価値観が合う）どうかを確認したりしていました。こうした過程で「社会」というものへの現実感も上がりました。

最終的に入社した会社では小学校の経験まで深掘りされるなど、毎回発見がありました。何度も対話を重ねることで、自分自身の価値観が整理され、この会社で何をしたいかも見えてきたと思います。入社してから仕事でもプライベートでも大変なことがたくさんありましたが、就職活動の時に一度自分を見失いそうになってから、いろいろ考える癖がついた経験が、今人生を割と前向きに過ごせていることに生きていると思います。

POINT 先生との対話をきっかけに、理想の自己のイメージが少しクリアになり、現実の自己に対する捉え方も変化した事例。企業から得る企業の情報によって、さらに自分を問い直す機会となった。

配属先が異なり仕事の重要度を下げるように

● Bさん　女性　● 入社先：通信会社・カスタマーサポート3年目／商学部

「大学を卒業するなら一度くらいは就職しておいた方がいい」と考え、周囲に合わせて活動を始めました。3年生の3月から始め、4月に2社内定が出たので終了。大好きな野球に関連する部署があり、いつか野球に関わる仕事ができるかもしれないと、入社を決めました。説明会では「君たちは営業はしない」と聞いたはずが、配属先は個人向け営業の部署で、モチベーションは一気に低下。仕事に重きを置かず、「遊ぶお金を稼ぐために働いている」と考えるようにすると、感情のブレがなくなり、仕事でつらいことを言われても、感覚が薄れていきました。将来的に野球関連の部署に異動できる可能性は10%くらいですかね。

思えば、全ての選考において、面接で聞かれたことに答えるだけで、会社の事業の仕組みや仕事内容、キャリアステップなど聞かなかったので、全く分からない状態で入社しましたね。それが想定外につながったのかもしれません。もし当時に戻れるなら、内定獲得以降も別の会社の選考も受けて、活動を継続すると思います。

POINT 理想がないわけではないがそこを深く追求するというよりも、現実的な代替手段を選択した事例。現実的な道を選ぶ際、業務内容についての情報獲得の甘さが入社後ギャップにつながった。

明確なイメージのない就職活動の道程

● Cさん　男性　● 入社先：メーカー・保守運用1年目／社会メディア学部

昔から人付き合いが苦手でした。アルバイトの飲み会なんて最悪。人と話を合わせるなんて苦痛です。だから会社で働くことに悪いイメージしかありませんでした。就職活動では何をしたいのか分からず、企業に何かをアピールできるイメージが湧きませんでした。「どこにも受からなそう」という思いが強まりました。

説明会に参加して、ワークライフバランスを大事にしている企業に魅力を感じましたが、どうしてその会社で仕事をしたいかを描けず、書類が通過しませんでした。

自分と合う人がいる会社で働きたいと思ったのですが、「自分と合う」ということがどういうことなのか、表現しにくいのであまり掘り下げませんでした。現職は、たくさん書類を送った中でたまたま通過した企業で、面接を受けてみると即採用。「もうこれ以上やっても他に受からない」と思いオファーを受けました。

実際に入社してみると、先輩がとてもやさしく安心して働けます。正直楽しい。ただ、もし一番信頼している先輩がいなくなったら、転職を考えるかもしれません。

POINT 理想の自己を描かず、現実的な選択肢においてのみ決定した事例。曖昧な情報マッチングによってミスマッチが起こりやすい例ではあるが、職場の人間関係は自分らしいライフキャリアを考える際、重要な観点になり得る。

情報の取得不足は進路決定の選択肢を狭める

● Dさん　男性　● 入社先：IT・SE2年目／経済学部

進路決定への動きを決めたのが大学4年4月。1年間で就職活動と公認会計士資格勉強を同時進行しようと考えました。しかし8月に資格試験に不安を感じ、就職活動に注力することに。そこで初めて多くの企業は新卒採用が終わっている現実に気づき、将来の進路に暗雲が立ち込めていると実感しました。

急きょ、大学のキャリアセンターから紹介されたり合同説明会で出合ったりした数社の人材紹介会社に相談し、専門家のサポートを受け始めました。就職先とし経理か事務職ポジションを依頼しましたが、実際に紹介されたのは希望とかけ離れた仕事ばかり。違和感を持ちながらも、「今エントリーしないと今後もっとチャンスはなくなっていきますよ」と言われ、片っ端からエントリーしていきました。

4年生の夏に採用している企業を探すのは至難の業だと思うので自分で情報を調べるなどの行動はあまりしませんでした。時間もないので、エントリーシートは人材紹介会社の提案するテンプレートの通り提出し、面接でもアドバイスされた通りにやったつもりが不合格になっていきました。

自分としては、きちんと計画を立てて、コツコツと努力をして点数や資格など、分かりやすいものでスキルが可視化されるキャリアが性分に合っていると思っているのですが、就職活動の時期を見誤ったことで、全て自分らしくない行動を取ってしまいました。最終的に「デスクワークであればいい」という基準でIT企業を7社以上受けた中で、今の会社に内定をいただき入社しました。

現在、SEという仕事自体は特にモチベーションが高くも低くもなく、顧客とのコミュニケーションにストレスはあるものの、最低限生活費を稼ぐこともできているので、そこそこ幸せではあると思います。

ただ、何かを積み重ねられているという実感はない。自分としては資格を得ることに安心を感じるので、不動産鑑定士など国家資格を取得し、転職することも考えたりします。本音を言うとFIRE※を目指しているので、過去に戻れるなら、具体的なFIREの目標を明示して、もっと早く動くように言っておきたいです。

※FIREとは「Financial Independence（経済的自立），Retire Early（早期退職）」の頭文字で、端的にいえば「早期退職して、お金のために働く縛りから自分を解放する」というライフプランや概念

POINT 理想の自己と現実の自己の区別は実際には難しいものでもある。理想の自分を考える際、それが実は社会的な（他者の）物差しである可能性を考慮するのも、自分らしさの追求の一つの方法といえる。